

被服製作実習を支援する授業展開についての試み

～被服解体を通して～

榎崎久美子

(2009年11月13日受理)

A study of the class development for Dressmaking

— By dismantling clothing —

はじめに

現代社会において、自らで被服を創造し、着用する者は限られた存在となった。現代人の多くは基本的に流行性の高い既製服を購入し、着用し、廃棄している。

そもそも日本の服飾文化においては、着物(和服)は一反の布から直線縫いを中心に仕立てられ、着用し、また解くことで染色を施して再び仕立て着用するという流れがあった。その着物が親から子、子から孫へ受け継がれることもそう珍しいことではなかった。また、着古してしまい、さすがに着用が難しい場合も、解いて布の状態に戻して、日用雑貨へ変貌させて使い切るという、布の用途を限定しない文化を持っていた。もとは着用していた被服が解かれ、布になる過程を目の当たりにしていた時代に比べて、現代の、特に若者は服装の構成に対して大変鈍感であると考えられる。

しかし、高等教育機関において被服について学ぶ者は被服文化、構成等に関心があり、また、他の分野の者よりも知識・思考において独自のこだわりを有することが望ましいと考えられる。よって、本学に在籍する生活デザイン・情報学科 生活デザイン分野のファッションに興味のある学生に対して、被服製作実習の授業において、どのように被服に対する興味・関心を引き出し、被服製作の大前提である被服構成についての理解を深め、ユニークな創作活動へと展開させることができるかが、本研究に至ったきっかけである。

先行研究について

被服製作実習の授業に関する先行研究は多く見られる。特に実習受講者の縫製技術と意識を明らかにする田村和子氏・西村千代氏による「大学生の被服製作に対する意識と縫製技術の習得」(『高知大学教育実践研究』20号、2006年)は注目に値するもので、本研究と関連が深いものであると思われる。また、本研究の考察を手助けするものとして、布施谷節子氏・高部啓子氏による「家政系女子短大生と母親の被服製作能力と被服製作の必要性に関する意識と実態」(『日本家庭科教育学会誌』46号3巻、2003年)が挙げられる。本学の学生も家政系の学生であり、短大生との比較も可能であるかと考える。研究手法として、母親の被服製作能力との関連も興味深いものである。

また、大学生ではなく、小・中・高の生徒を対象として、家庭科の授業における被服製作実習の製作キットなどの利用に関する研究も興味深く、関連するものであると考えられる。というのも、本学学生もこれまでの被服製作においてはキットを使用して実習を行ってきたものが少なくないのである。自分自身で布を選び、裁断し、また、そのほかの服飾資材を準備すると

いう一つの被服を完成させるプロセスについて、実質的な体験をしているものが少ないため、結果として、縫製技術が未熟である、あるいは構成への理解が不足しているという結論が導き出されるであろう。

こういった先行研究の中で、被服構造の理解のため、既製服の解体をしたものは、特に大学生を対象にしたものは見受けられない。これはおそらく、それまでの中等教育課程の段階で行われている、基礎知識は十分あろう、という前提があるからだと考えられる。しかし、学習指導要領における「家庭」の時間削減や、食分野に重きをおく社会風潮から十分な被服製作実習及び体験をした学生は少なく、大学の被服実習が実践的な実習の機会であるという現状である。

方法

1) 調査対象

広島女学院大学で行われるファッション・デザイン実習Ⅱ（洋裁）を受講する学生16名

2) 調査日

2009年10月5日及び19日

3) 方法

①被服構成に関する基礎知識として、洋服（シャツ・パンツ・スカート）の部分名称を解説する配布資料（図1）を用い、講義する。調査者は講義を聞き、配布資料に用語を記入する

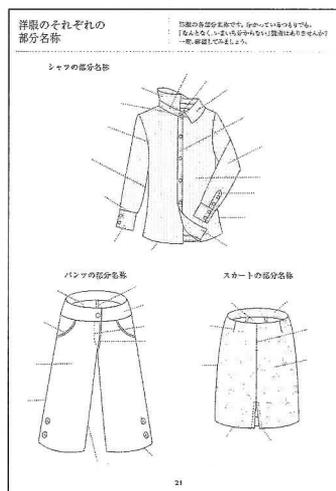


図1 洋服の部分名称を確認する配布資料（注1）

また、ワンピースデザインにも使用できる部分名称やデザインに関する以下の用語を確認させる。別の配布資料に用語がすでに記載されており、形については黒板を使って説明し、それをメモするよう指示をした。

シルエットについてはストレートシルエット・フィット&フレアシルエット・テントシルエット・逆三角形のシルエットの4用語を、切り替えについてはセンターライン・プリンセスライン・パネルライン・ノーマルウエスト・ハイウエスト・ローウエスト・ヨークの7用語を、ネックラインについてはラウンドネック・Uネック・ボートネック・スラッシュドネック・オープンフロントネック・Vネック・バレリーナネック・スクエアネック・ダイヤモンドネック・ハートシェーブトネック・スカラップネック・アシメトリックネック・ストラップレスネック・オフショルダーネック・キャミソールネック・オブリークネック（ワンショルダーネック）・ホルターネックの19用語を、袖（スリーブ）については、ノースリーブ・ハーフスリーブ（3分丈・4分丈）・エルボーレングススリーブ・スリークォーター（プレスレット）スリーブ・リストレングススリーブ・セットインスリーブ・ドロップトショルダーズスリーブ・エポーレットスリーブ・ラグランズスリーブ・ヨークスリーブ・タイトスリーブ・ランタンズスリーブ・タックススリーブ・チューリップスリーブ・ダブルスリーブ・フレアスリーブ・バゴダズスリーブ・レッグオブマトンスリーブ・ビショップスリーブ・ピラゴススリーブ・ドルマンズスリーブ・シャツスリーブ・キモノスリーブ・エポーレットスリーブ・パットウィングススリーブ・フレンチスリーブ・キャップスリーブ・ナチュラルアームホール・スクエアアームホール・アメリカンアームホールの29用語を確認させた。

②被服構成に関して気付きを促す配布資料を用い、学生それぞれに被服の解体を行わせる。解体する被服は各自の家で廃棄する予定の不要服を使用する。配布資料の項目は以下の内容である。

<裁断する前に>

- ・何枚の布を合わせてその被服ができているか、予想パーツ枚数を記入
- ・袖ぐりの形を見て、自由記述
- ・衿ぐりの形を見て、自由記述

<裁断>

- ・付属品の種類と数の記入

<裁断した後は>

- ・何枚の布を合わせてその被服ができていたか、パーツ枚数を記入
- ・袖ぐりの印象変化を、自由記述

- ・ 衿ぐりの印象変化を、自由記述
- ・ そのほか解体被服の観察を通して、自由記述

③解体した被服を用いて、被服の部分名称の再確認と解説

4) 使用した道具

不要服、裁ちばさみ、糸切りばさみ、リッパー、定規



写真1 作業の様子 Tシャツを解体する調査者

結果及び考察

1) 解体した被服について

調査者が持参した被服は、カッターシャツ、セーラー襟付半袖カットソー、半袖Tシャツが3点、ストライプブラウス、フード付長袖カットソー、アーガイル柄襟付シャツ、長袖Tシャツが2点、白ブラウスの計11点であった。本来1人につき1点を持参するよう指示を出したが、忘れた学生がいたため、何着かは2人で解体を行うよう指示した。

持参した被服はすべて女性ものの被服であった。また、持参する不要服の種類は指定しなかったが、普段使用頻度の高いニット素材のカットソーを持参する調査者が多く、次いで綿のブラウス・シャツ形式のものが多かった。これらは、調査者が最も身近に着用している被服であり、かつ、買い替え頻度が高いため不要服として持参しやすいものであったと考えられる。

今後の指導に関しては、一人1着の不要服の持参は徹底する必要があると考えられる。

また、持参する被服の偏りがみられるため、事前に調査者にグループを作り、Tシャツ、ブ

ラウス・シャツ形式以外の被服、たとえば、下衣や男性用の被服も含めて持参させるという指導法が考えられる。これらのバリエーションのある被服の解体を行うことで、被服構成への理解がより深くなると考えられる。

2) 解体前と解体後の被服構成パーツ枚数について

調査者は被服解体前にまず被服を5分程度観察し、構成パーツ枚数を数え、配布資料に記入を行った。

その後、実際に解体したのちはそれらを広げて、実際の構成パーツ枚数を数え、記入した結果は以下の表1のようになった。

解体前	解体後	被服の種類
4	6	①半袖Tシャツ
4	5	②半袖Tシャツ
5	6	③セーラー襟付半袖カットソー
5	6	③セーラー襟付半袖カットソー
5	7	④長袖Tシャツ
5	7	⑤長袖Tシャツ
10	25	⑥白ブラウス
10	12	⑥ストライプブラウス
10	10	⑦半袖Tシャツ
10	12	⑥ストライプブラウス
11	16	⑧フード付長袖カットソー
12	22	⑨白ブラウス
15	15	⑩アーガイル柄襟付シャツ
15	15	⑩アーガイル柄襟付シャツ
18	20	⑪カッターシャツ
18	20	⑪カッターシャツ

表1 被服解体前と解体後の構成パーツ数の変化

ほとんどの調査者は実際のパーツ数より少ない数を解体前に記入している。構成が比較的簡単なTシャツに関してはほとんど誤差がないが、シャツ・ブラウス形式の解体を行った調査者は誤差が大きく、見た目以上にパーツ数が多いことに驚きを隠せないものもいた。

この調査は解体前後で自身が思っているより多くの構成パーツがあることを理解してもらうことが狙いであったが、調査者の反応からそれが成功したことがうかがえる。

ただし、同一の被服を解体したにもかかわらず、解体後の構成パーツ数の齟齬のある調査者がいたため、授業に対する集中力の向上と共同作業者との確認作業の重要性の認識を高める必要があることが今後の課題である。

3) 被服解体前と解体後の印象記述内容について

①袖ぐりについて

調査者は解体前に被服の袖ぐりの形について、観察を行い、その印象を自由に配布資料に記入した。

その後被服解体を行い、解体後の袖を確認し、その印象を配布資料に記入した。その結果は表2のとおりである。

袖ぐりの印象(解体前)	袖ぐりの印象(解体後)
ノーマルな半袖・ポロシャツとかの袖に似ている	思ったより袖ぐりを短く取っていた
セットインスリーブ・きっちりとした型	前の型を想像できそうにないほど変わった
ナチュラルアームホール	袖をのけるとランニングになった
SPにぴったり	特に変わりはない
ノーマルな形・腕の動かしが自由で動きやすそう	想像どおり、4枚からできていた
セットインスリーブの形になっている	変わった。 服を見た感じと裁断した後は複雑になっている
体にぴったりな感じ・ゆとりがあまりない・見た目が少しきつそう・動きにくそう	記述なし
切り口が楕円形	変わった。 とても多くの布でできていたが、つながっていて、折り返して縫われているところも多かった
腕の付け根で切り替え・ストレートスリーブ	思っていたよりも袖ぐりは広く開いていなかった。 曲線がなだらか
SPにぴったりでちょうどいい	こまかかった
ゆるいカーブになっている	大きかった
ゆるいカーブになっている	野球のホームベースのような形になっていた
体にぴったりなままだ・ゆとりがない	広がった
ナチュラルアームホール・リストレングスリーブ	袖にギャザーがよっていた
大きめに作られている	形がだいたい変わった。大きい
SNPから少し曲がって下っている・ゆったり	頑丈に縫ってあると思った

表2 被服解体前と解体後の袖ぐりに関する印象変化

調査者の記述には「セットインスリーブ」「ナチュラルアームホーム」など名称用語を使用する解答が見られた。しかし、3分の1の学生の回答の中に「ゆとりがある」「腕の付け根で切り替えがある」など見た目のままの記述であったので、全員が用語を活用した記述ができるよう事前指導で確認が必要である。また、事前に採寸の授業を行ったため、採寸に関する用語(注2)が使用されていたことから、採寸と被服構成の関連がうかがえた。

広げてみたときの形について言及する解答もあり、解体前には単なる長方形の筒のように見える袖が、広げてみると「野球のホームベースのような形になっていた」という記述から確認できるように、思った形と違うことに気付いた調査者もいた。本調査の狙いはここにあり、見た目と実際身体に沿うようにデザインされたパーツの形の違いをもっと気づいてもらうために

は、解体後の解説でより丁寧な説明を必要とすると考えられる。

②衿ぐりについて

調査者は解体前に被服の衿ぐりの形について、観察を行い、その印象を自由に配布資料に記入した。

その後被服解体を行い、解体後の衿ぐりを確認し、その印象を配布資料に記入した。その結果は表3のとおりである。

衿ぐりの印象(解体前)	衿ぐりの印象(解体後)
大きな襟がついた V ネック「セーラーカラー」 折り目をつけることで形づくっている・ フロントネックポイントから左右に 10cm ずつ	思ったより衿ぐりを広く取っていた・V ネックだった ものが正方形のような形をしていてびっくり!
広くなくびったり	あまり変わらない
ラウンドネック	衿のパーツが垂直2つあった
ボタンをとめると首にびったり	衿のパーツが4つもあり、縦丈に作られていた
セーラーカラーの袖・V ネック・大きな白い襟が 付いている・フロントネックから10cm 空いている・ 2種類の布を使っている	セーラーカラーの衿が1枚だと思っていたら 2枚の布からできていた。
あまり開いてない・わりとびったり	あまり変わらない・見た感じと変わりがなかった
フロントネックポイントより上で、びったり。 見た目が少しきつそう。動きにくそう。	3枚の布からできていた
衿はれく、フロントネックポイントから大きめに 開いている	変わった。2枚でできていてゆるいカーブが かかっていた。
フロントネックポイントよりも少し広めに 開いている	前身頃と後ろ身頃を比べると、衿ぐりのあき具合が 違った。(前身頃の方が広く開いている)
基本びったり・ボタンで調整する	こまかかった
襟から首の中心に向かって V の形になっている	ゆるいカーブのままだった
襟から首の中心に向かって V の形になっている	裁断前と一緒だった
フロントネックポイントより上で、びったりに なっている	3枚の布からできていた
Uネック・開いている	後ろ身頃の方が深い、
衿はれくて、フロントネックポイントから結構 開いている	大きい。これを見てもどこの部位か全然わからない!
一番上のボタンをとめるとびったり	身体の形にフィットするように作ってあるとわかった

表3 被服解体前と解体後の衿ぐりに関する印象変化

衿の形について、「ラウンドネック」「Uネック」など名称用語を使用する解答が見られた。しかし、袖ぐりの印象記述と同様、学生の回答の中に、「基本びったり」「ボタンをとめると首にびったり」など他者に印象を説明するには語彙不足の記述がみられた。そもそも、記述前に質問意図が十分理解できていない可能性も高いと考えられる。この調査においては、衿がどのように被服につけられているか、また、見た目の衿の形と解体した際の形の印象の変化を記入してもらうことが狙いであったが、指導の際にはそういった説明を丁寧にする必要があると考えられる。また、作業後の記述であることから疲弊してしまった学生も見られたため、集中力の向上が授業内で努力すべき点であると考えられる。

また、袖ぐり同様、採寸に関する用語との関連性も見られた。授業の間隔が近いうちは用語

を確認し、使用する傾向があることがうかがえるため、普段の授業でもこういった専門用語の活用を増やし、デザインや製作現場でのコミュニケーションに活かすよう指導が必要であることがわかった。

衿については更に一点特記すべき事項がある。ブラウス・シャツ、また衿付のカットソーを解体した学生の回答からは一様に衿が複数枚で形作られていることへの驚きが多くみられた。普段着用する被服が軽装化し、衿のある被服は堅苦しいイメージがあるのかあまり好まれないようであるため、同時に、その構成についてもあまり興味を抱くことがないため、このような結果になったのだと考えられる。

4) 被服解体後の印象について

被服解体作業終了後、調査者に改めて解体した構成パーツを大きく広げさせ、観察を行わせた。また、特に構成パーツ数の多いシャツの部位を使って、今一度被服の部分名称を確認し、解説を行った。



写真2 解体した被服 もっとも構成被服パーツ数の多かったカッターシャツ



写真3 解体した被服 前身頃のデザイン性の高かったTシャツ

この内容は今後ワンピース製作を控える調査者へより被服構成パーツの理解を深めるためのものである。その後、解体作業全体に関する印象を自由に配布資料に記述してもらった。その結果は表4のとおりである。

用語等を解説後であったため、袖、衿以外にも言及した記述がみられる。また、今後ワンピース製作をするにあたって、「見返し」の理解は不可欠であると考え、解説の中で丁寧に述べたが、それについては記述がなく、印象に残らなかったことがうかがえる。しかし、多くの部位があることから被服を1着製作することへの労苦や大変さ、また、現在使用している被服の作り手への意識が芽生えたことが大きな変化であったと言える。

全体的な印象
衿が二重張りだったことに気づけなかった。袖の形がインツのような形だったことに驚いた。
ボタンのところの布は別で作られているとは思わなかった。
袖付け根がとても大きい
衿やそでなど細かいところほどパーツが多くあった
胴は一枚の布からできているのではなく、何枚かの布でできているということに改めて感じた。
衿は今まで1枚の布でできていると思っていたけど、衿のほとんどは2枚からできていることに気づきました。
何枚も布を重ねてできていることが分かりました。切った後は、1枚ずつが丁寧に重なっており、人の手によって作られているありがたみがありました。
袖のパーツが思ったより多かった。
思ったよりも多くの布でシャツはできており、たくさんの部品が合わさって1つの服ができていることが改めてわかって服を作る大変さが分かった。
前身頃は何枚もの布をつなぎ合わせたうえで、縫い目を表に出したデザインだったので、予想していたけどパーツが多くて驚いた。
こまかかった
すそ上げが意外と丈夫に作ってあった。
たくさんのパーツからできていることにびっくりした
袖のパーツがとっても多くてびっくりした。身頃の布が全部つながっていて、ダーツになっていた。
ダーツが全然なかった。衿ぐりが思ったより広かった。衿のパーツがあったことに驚き。
1枚の服でもたくさんの布でできていることが分かった。いろんな部位をつなぎ合わせているのでそれだけ作るのは大変だと感じた。
布の端が違う布で覆われていて、見た目もよくてまっつれないようになっていてすごいと思った。

表4 解体した構成パーツに関する説明後の全体的な印象

ワンピース製作へつながる構成理解については、やはりワンピース解体が最も適していることが言うまでもないが、そうではない被服に関しても理解を深めることによって、調査者自身の被服への意識は確実に持たせることができる、ということが本研究から明らかになった。ワンピース製作実習のみに重点を置くのではなく、今後の衣生活にもかかわる内容としてこの授業展開は考えていくべきであると考えられる。

5) 授業全体の印象記述について

筆者の授業では授業の終わりに授業全体を振り返り、どういったことを理解したかなどの感想を書かせている。この調査日の授業においても同様のことを行ったが、その中で被服解体の作業についての記述がいくつか見られたので、表5を用いて確認をしたいと思う。

調査者の概ねの感想は被服解体後の印象と同様のものであるが、その後行ったワンピースデザイン画作成の作業と関連させて感想を記入したものもいた。これは本研究の最も重要視したワンピース製作への支援という狙いにつながった解答である。こういった感想を持つものが増えるよう、より理解しやすい授業展開の工夫が必要である。

授業全体の感想より被服解体作業に関する記述のみ抜粋
なかなか服を解体するという経験はできないため、とても貴重な経験になった。 これからワンピースを作る上で、解体したパーツを見ておくことはイメージがつきやすく、助かった。
服1枚の完成のために何枚も布を使っていることも知れて勉強になった
シャツがとでもたくさんの布でできていたので驚いた。とても疲れた。
服の構造がどうなっているかをじっくり考えることができた。
地味な作業だった。こまかなパーツがたくさんあった。
服のパーツがたくさんあるので嬉しかったです。
今日はいろんな作業をして大変でした。

表5 授業全体の感想より被服解体作業に関する記述のみを抜粋

おわりに

本研究は、ワンピースという被服の製作をその後の授業に控える調査者に対して、その理解を支援するために、被服解体という作業を行わせたものである。普段被服管理を他者に任せているものが多いと考えられる調査者たちにとって、着用していた被服にはさみを入れるという体験はほぼ初めてのことだったようで、作業終了後は疲労していたものの、新しい発見に目を輝かせていたことも大きな発見であった。

調査の結果からは、解体する被服の選定の徹底と、解体後の解説を詳細なものにすべきであるという反省点はあるものの、概ね、構成理解へのきっかけにはなったことは明らかである。来年度の同一授業においても、本研究の反省点を活かし、より被服構造の理解とワンピース製作への導入のための授業展開を行っていきたいと考えている。

最後に実習授業に際して授業進行及び写真撮影等に協力いただいた植木由香実験実習助手に感謝いたします。

注

- 1 『知りたいことがすぐわかる！ソーイングの基礎レッスン 手縫い・ミシンソーイング』アップルミント 2008年5月10日 P21より引用
- 2 SP=ショルダーポイント SNP=サイドネックポイント

図・表・写真出典一覧

図1 注1参照

表1～5 調査表を用いて筆者が作成

写真1～3 広島女学院大学 実験実習助手 植木由香氏撮影

参考文献一覧

- 1 『文化ファッション大系服飾造形講座③ ブラウス・ワンピース』文化服装学院編 文化出版局 2000年4月1日